

## 序

朽木谷は滋賀県のチベット、滋賀県の北海道、滋賀県の秘境、陸の孤島などと呼ばれ、戦後の過疎問題とも絡んで注目を浴び、地元の有識者のみならず多くの学者・研究団体により、一通りの権威ある研究が完了している。しかし、これらの諸研究にも拘（かか）わらずなお疑問の解けない点が残し、中には納得の出来ない所論もあって、改めて研究意欲をそそられるのがこの地域である。地理上地質学上の問題もあるが歴史上の問題にしぼり、高校生のバス巡見の一資料たるべく、本稿をまとめる所存である。

### 1、此の地域の古称名に就て

最古の古称については二説ある。一つは高島郡桑原郷説であり今一つは高島郡川上郷説である。前者は倭名類聚抄承平年間の記事を根拠にする説で、地元の採用する処であるが、針畑（はりはた）地区にある桑原と無理に結びつけた説と思われる。後者は倭名抄にも出てくるが古今著聞集の「高島郡平等院川上庄」にも拠り、日本地名辞典の採用する説であって、高島郡のなかで川と云うに値するのは安曇川だけであることからみても、後説が妥当であると判断できる。

朽木の名称の初出は、長保三年（1001）中納言太宰権師平惟仲、高島郡朽木荘を白川寺喜多院に布施とある高野山文書である。繩宇簡集によれば、長保四年（1002）朽木荘は喜多院領から藤原頼道領となり、これから朽木の柚・時には朽木一仙の名で呼ばれている。

### 2、朽木谷に於ける古い文化遺産に就て

先史時代を探るべき考古学上の資料は未発見である。文化遺産がみられるのは、平安時代貞観元年（859）以後である。

- ①北嶺山息障明王院葛川寺 貞観元年、天台宗相応により、天台別院無動寺の奥院道場として坊村に創建さる。本尊三尊像（木造毘沙門天立像・木造千手観音立像・木造不動明王立像）は藤原時代の重要文化財、護摩堂木造毘沙門天立像も有名。
- ②坊村地主神社 明王院創建以前から存在し思古淵明神を祀る。明王院創建後天台の山王権現・六所明神が主神となる。神像八軀藤原末鎌倉始の作の重要文化財。
- ③迹々杵神社（旧朽木大宮権現）坂本の日吉社から日吉大宮権現を宮前坊の地に勧請、市場（朽木市場くつきいちば）の山神社と共に朽木谷中の産土神とされる。
- ④宮前坊神宮寺 貞観年間に延暦寺末寺として創建、本尊は不動明王、旧神宮寺跡に平安期の多宝塔建立（文化 14 年修覆）
- ⑤式内社大川神社 現針畑生杉（おいすぎ）の大己貴命を祀る大川明神か
- ⑥叡山三千坊に属したとされる寺院 約 10 寺の存在確認、内有名寺院は柄生腰越の薬師堂（藤原時代作 木造薬師如来像・宝篋印塔蔵）
- ⑦中牧大宮神社 十六善神像・大般若経六百巻蔵

⑧小川思古淵神社 承久三年(1118)の藤原通清の写経蔵

⑨小入谷山本覚雄家 伝管公自画像蔵

⑩曹洞宗興聖寺 道元北陸下向時、佐々木信綱(のぶつな)に奨め 1240 創建 木造釈迦如来像は重要文化財。以後曹洞宗寺院相つぎ創建。その代表的なものは朽木宣綱による野尻秀隣寺及重要文化財木造阿彌陀仏如来像を蔵する雪洞谷洞照寺で、計 28 寺に及ぶ。興聖寺は將軍足利義輝の亡命所となり、その時造営した足利庭園は有名。

上記の如く、古い文化財の多いのは驚きであるが、その殆ど(ほとんど)が宗教関係であることに特色がある。山岳と川からなる秘境であるから、朽木谷に踏み入った古代人が山神社、川の神を地主神として信仰するのは自然である。山の守護神を祀(まつ)る社は九社あり、川を司る神を祀る社は 13 社も存在する。山神社には大山祇(おほやまつみ)神を祀る社が、川神社には筏師の守護神たる思古淵(しこぶち)神を祀る社が多く、これらは仏教伝来以前からの古社であらう。

しかし、此の地域に遺る古文化財は、殆ど仏教関係のものばかりである。最古の寺院は葛川明王院・宮前坊神宮寺であるが、どちらも天台宗延暦寺系であり、ついで比叡山系から朽木谷に伸びた叡山三千坊に属する寺が 10 寺も創建されており、これに伴い、天台宗と結びついた日吉神社が五社も勧請(かんじょう)されている。

應(やが)て時代が移り武士の支配する鎌倉時代になると、既述の通り興聖寺創建を始めとして曹洞宗が普及し、幾多の曹洞宗寺院の創建をみた。殊(こと)に信長の比叡山焼打ちの影響は大きく、それまでの天台宗系寺院は三ヶ寺を残して悉(ことごと)く曹洞宗に改宗し、その後の新寺院創建は殆ど曹洞宗ばかりとなったのである。

朽木谷の古文化財は、このような宗教の盛況を反影(はんえい)するものだと考えてよいであろう。そして上記古文化財が損傷を受けることなく保存され、多くが重要文化財の指定を受け得たのは、地理的風土的条件により、戦場となることなく、外部からの侵入略奪を妨げたからであらう。

### 3、朽木に於ける注目すべき歴史上の事件

①奈良時代東大寺創建に当り、同寺の用材の一部が朽木の柚(そま)山より切出され安曇川より舟木・瀬田川・木津川を経て奈良に運ばれたと云う。これは朽木の歴史に現れた最初であり、朽木が大木の一供給地であったことを物語る。

②享禄元年(1528) 將軍足利義晴、三好党との和議破れ、朽木植綱(たねつな)を頼り一時現興聖寺の辺りに仮御所を置き亡命。

③天文 20 年(1551) 將軍義輝、細川晴之と共に三好・松永等に京を迫はれ朽木谷に亡命。翌年和議成立、京都に帰るも、その翌年和議破れ、再び朽木谷に亡命し五年間滞在す。この間足利庭園造営。

④元亀元年(1570) 越前朝倉義景を攻撃した織田信長は、北近江浅井長政に挟撃され急遽撤兵、若州より朽木に入り、間道を経て京都に入り事なきをえた。

これら朽木が將軍の亡命地になったり、信長の危機を救うことになり得たのは、朽木谷が京都に近いにも拘(かか)わらず外部から侵入し難い地の利をもち、しかも概して平和で治安が保持されており、特に東西南北どちらにでも避難出来る間道に恵まれていたからだと考えられる。

## 4、朽木人の由来

### ① 杣人（そまひと）・木地師（きじし）の来住活動

朽木は深山幽谷で良材大樹の宝庫であり、輸送も（不解読、軌か）運の便があった。東大寺建立の用材の一部がここより切り出されたとの伝説（でんしょう）も不自然でない。天平六年（734）の正倉院文書には、東大寺大仏鑄造に近江の轆轤（ろくろ）工二人の貢献の記録があり、早くから近江の山に優秀な技術を持つ木地師集団があったことは明瞭で、彼等は山々を轉々（てんでん）とし、朽木の杣（材木を切り出す山）に入ったことは当然であらう。平安時代の古記録では、此の地は朽木の杣の名で呼ばれていて朽木荘の呼称は例外である。そして古くから木地師・木地屋集団であったことは、偽書ながらも木地山文書・村井宮川文書の存在そのものがそれを物語る。

又、朽木最古の神は山神及び思古淵（しこぶち）明神であり、共に地主神であり思古淵神は筏（いかだ）師の守護神でもあるが、前者は九社、後者は十一社も奉祀されている。これらの諸社は殆（ほとん）ど天台宗がこの地に入る前から祭祀されているのであって、この地は最初杣人の活動舞台であったことを物語るのである。更に朽木には木地師（木工職人）集団と関係の深い地名が多く、木地師の活動を示す伝承のある地域が以外（いがい）に多い。その上昭和40年現在で総戸数の60%が林業に従事している。

以上を総合（そうごう）して、朽木最初の住民は杣人であり、それに伴う筏師・木地師であったことは断定して誤りあるまい。彼等は朽木谷を轉々として移住する一方、次第に分散定住して聚落（しゅうらく）を作り朽木人の本流となったと考えられるのである。

### ② 有力天台寺院創建その信仰普及に伴う関係者の定住

朽木谷最初の寺院である葛川明王院建立に就ては既述の通りである。同寺は相応が、清冽な滝川である葛川で修行中、生身の不動尊を拝したことが動機となって建立されたと称せられて霊場となり、天台回峰修行者参籠の別院道場として発達した。更に比叡山には明王院建立以前から妙法・最勝などの精舎があり、諸国の行者集まり修験道が発達していた（続日本記・三代実録）が、躰（やが）てそこの行者も訪れるようになった。

一方宮前坊に、朽木大宮権現の神宮寺が創建されたことも既述した。神宮寺は躰て天台宗の末寺となったが、更に後に各部落に建てられた天台寺院本末関係を結んでそれら諸寺院の本山となり、明王院同様永く回峰行者の同場となった。かくて天台信仰は朽木中に普及し、叡山三千坊に属したとされる寺院は10箇寺に及び、それに伴う日吉神社の鎮座も4社に及んでいる。

以上の点からみて、少数ながらも神主・僧侶の定住は必然となり、回峰行者・修験道者特に参籠者の増大に伴う旅宿業者の定住増大が必要となる。時代が降（くだ）るに従って貴族・武家のみならず庶人の参詣も増大し、旅宿のみでなく商人も入用となる。かくて葛川坊村・宮前坊の如き、いわば門前町とも云うべき集落が成長してきたことが考えられるのである。その住民は主に京都方面からの移住であらう。

### ③京—北陸間最短間道発達に伴う交通運輸業者の定住

先ず道路の発達に就て概観しよう。最初の道は「けもの道」「杣人（そまひと）の道」で普通人の通行は不可能であったらう。臈（やが）て杣人の活動・用材の筏流しの必要上、安曇川の河岸段丘を利用した道が形成してきたと考えられる。最初に作られた街道は比叡山より葛川明王院への回峰行者のための巡行道であったらう。

花折峠までは三道あるがこの難所からは一本道である。宮垣家文書に依れば、相応（相応和尚、そうおう かしょう 831～918年）葛川入りの時、一千人の人夫でこの難所を越える道作りをした由。明王院信仰のため勅使・公家・武家の参詣多く、室町時代には義満・日野富子・義尚もこの道で参詣している。上記街道の整備につれ、始め筏流しとの関係で出来たと思われる安曇川沿いの路も発達し、特に宮前坊は信仰の中心地であり、市場が政治経済の中心地となり、安曇川本流の要所所に聚落が出来てみれば、それをつなぎながら坊村もより市場（いちば）・宮前坊に至る所謂朽木街道が整備されるのは当然である。

この街道は北の途中谷へ伸びて若狭本街道へつながり、京より北陸への最短間道となるのである。是（これ）とは別に北陸の海産物を担（かつ）いで京に運んだ鯖（さば）の路（みち）がある。最も古い路は山の峯を通る尾根道であり、三国獄（だけ）の尾根道を通り、そこから降（お）りた処（ところ）に十兵衛茶屋があったと民話にあるが、道筋がはっきりせず想像説があるに過ぎない。後世の鯖の路は遠敷（おにゅう）から出発するが途中（とちゅう）で分れて二系列になつたらしい。別に遠敷から市場への輸送路が二道あった。更に朽木の中心地市場・宮前坊と湖面をつなぐ主街道・従街道も発達した。

しかしこれらはどれも悪路であって、物資は人力や牛馬で運ばれ、便利な車が登場するのは街道の進んだ江戸時代になってかららしい。かくみると、京・北陸間を結ぶ最短街道が若狭別街道とも呼ばれる朽木街道であり、北陸海産物の京への最短輸送路であったのが鯖街道であって共に古来なくてはならぬ道として、夫々重要な役割を果たしてきたのである。特に朽木街道が、交通路として古くから如何に多くの人々に利用され著名人の通路となったが、軍事的にも如何に重要な役割を演じたか、また古代から領主への貢物を如何に多く運び、京都に如何に多くの物資を輸送したことであらう。

従って街道の要所には問屋が置かれ関所も設けられている。領主は当然のこととして「商人銭」「馬宿銭」の名で交通・商業に課税している。かくして街道の要所には、通行者の休憩所・宿泊所は勿論、人・物を運ぶ交通運輸業者が問屋を中心に定住して営業したに相違ない。本街道程（ほど）でないにしても、朽木文書に「京まで下向の商人が通る」「車五四台に積んで、かいあわびが京へ行く」の記録がある通り、かなりの通行輸送量が考えられ、しかも川渡しあり、急坂ありの難路であってみれば、交通運輸業者の必要性は大きかったと思う。坂本の馬借・車借のような大勢力ではあり得ないが、商人宿等の経営者共々街道の要所には欠くことの出来ぬ存在であった筈（はず）である。

### ④京よりの逃避隠棲者及びその子孫の定住

朽木の杣は古くから、亡命逃避には絶好の地らしく幾多の伝説（でんしょう）史実が見られる。即ち、生杉（おいすぎ）にはでばの皇子塚と称せられる塚があり、これは履中天皇の御子、市辺押磐皇子の塚だと伝えられ、名田庄挙原には「みつ峯の皇子さま」と称せられる塚があり、同皇子は雄略天皇に殺されたと伝説されている。又、長和五年（1016）から万寿三年（1026）の間、後一条天皇の皇子が藤原氏の一族

と共に村井の池の沢に住みつ。藤原一族はそのまま定住し、朽木谷に存する藤の字を冠する家はこの藤原一族の子孫という。大野では、桑野に昔公卿が住んでいた遺跡があり、そのせいかこの地から絶世の美女がでたとの伝説がある。これらは史実とは考えられないまでも、貴人の某名が幾件かはあったと考えてよい伝説であらう。

武士の時代になると武士の亡命定住が見られるようになった。永正四年（1507）足利義植に攻められた將軍義澄は、朽木谷に逃げて朽木氏に頼っている。享禄元年（1528）將軍義晴は、三好党との和議が破れ朽木谷に亡命し、現興聖寺の辺りに仮御所を置いて滞在する。秀隣寺は義晴亡命の館を以て開いた寺で、始め周林院と号して創建されている。天文二十年（1551）將軍義輝は、細川晴之と共に三好・松永の党に京を追はれ朽木谷に亡命する。翌年和議なり、一旦帰京したが、その翌年和議破れ再び朽木谷に亡命し五年間滞在する。この間に出来たのが足利庭園とも呼ばれる旧秀隣寺庭園である。地子原（じしはら）では、朽木宣綱の時亡びた京極氏の重臣上坂・下坂氏が亡命し来り、打明（ひらき）の里を開墾定住した。下坂家は今も佐々木京極友の会の会員なる由。

以上の代表的な伝説・史実からみて、古代から貴人・武将の亡命移住せる者少なからずその子孫の定住も亦尠（すくな）からずと判断される。又領主朽木氏は飛鳥井家・京極家等貴族有力大名家から室（しつ）を迎えるを常としたから、これに付添う教養人の来住も累増したと考えられる。京に近くして京都の情報を得易（えやす）いに拘（かか）わらず天然の要害の地であり、平和の地であった地の利が人々を引き寄せたのであろう。

#### ⑤領主被官及朽木氏一族郎党の定住

古代朽木荘の領主の変遷・その支配形態は、一時期を除き不明であるが、朽木氏入部（にゅうぶ；領内に入る）前は延暦寺領であり、その荘官として坊村少将が居住し、朽木氏の祖佐々木信綱入部時は激戦となり敗北獄死したことは、抜塚（ぬけづか；通り抜けができる塚）等の物証もあり史実であらう。佐々木氏は後朽木氏を称したが、多くの部下を連れて入部したことは当然である。市場を植民地として陣屋を築き必要に応じて砦も造り、更に領内支配の為各地に被官を派遣定住せしめた。かくて中世以降は武士身分の者の定住者数もかなりの数にのぼったことが推測できる。これが領内の安定を齎（もた）らし、朽木氏の保護を得れば安全だとの感を多くの亡命者に懐かせたに相違ない。

#### ⑥諸産業の開発展に伴う庶民の定住

これまで杣人（そまひと）・筏師・木地師（きじし）等朽木の大自然を相手とする人々の定住をみ、二大天台寺院を中心とする宗教関係の門前町とも云うべき定住ぶりを見、更に朽木街道を中心とする道路の発達に伴う交通輸送関係者の増加や都からの逃避亡命者の以外に多いこと及び中世以降支配者としての武士集団の増加をみてきた。

しかし人間が生活する上で欠くことの出来ないのは諸生産活動である。最も重要な農業は始め杣人の事業であったが、鰯（やが）て高島・若狭から専門家が入部開墾するようになった。安曇川本支流は川魚の宝庫であったから漁業も盛んになり、天然のうなぎ・アマゴ・鱒・鮎・泥鰌（どじょう）が大量にとられた。

寒冷地で森林地帯であるから炭焼は大いに発達している。製茶・ベベの名で呼ばれる燈油（とうゆ）づくり・養蚕・麻布づくり・藤布づくりは副業として行はれていたが、臆て専門者が出現するに至った。鉾産物にも恵まれ、磨き砂（白土谷）採掘・マンガン堀・土木建築用岩石の切り出しが行われ、これらとの関連で火打石・砥石・硯も製造された。亜炭も出土した。

かくて兼業副業ですんだ諸産業も需要の増大・技術の進歩に伴い専門者を必要とするに至り、諸産業に従事する庶民の増大定住を見るに至ったのである。

了 2023.02.09 旧字の訓読、意味を添えた 啓之。

朽木 歴史的行政データ：<https://geoshape.ex.nii.ac.jp/city/resource/25523A1968.html>